

クラス	311	担当教員	小坂啓史
テーマ	視覚・映像文化の社会学～鑑賞・分析・創作を通じて学ぶ～		
著書・論文	【近年の研究課題】文化社会学（映画社会学、芸術社会学）、相互行為とケア		
研究課題等	2023年「スティーブン・スピルバーグ監督と『映像化社会』」（鼎談） 2022年「ケアの動機とアフォーダンスについての考察」（論文） 2020年「映画の表現技法におけるモンタージュと鑑賞」（研究ノート） 2020年「芸術への解釈的相互関係の視点とパウル・クレイ」（論文）		
ゼミナール概要			
キーワード：			
<p>《内容・方法について》</p> <p>(1) 視覚芸術・文化へのノによる社会的影響を社会学で読みとく</p> <p>このゼミでは「社会的想像力」(ミルズ)を用い、制作者によって表現された作品、とくに視覚芸術・文化のさまざまな作品を社会的に読みとき、時代や社会との相互影響関係について広く考察していきます。対象としては、実写だけでなくアニメーションをも含む映画・映像作品、写真や絵画・イラスト、漫画やグラフィック・ノベル、バンド・デシネなども含まれます。さらに、現代社会における社会問題や社会状況が、上記のような作品でどのように表現されているか、どのように問題提起されているか（あるいはされていないか）についても考察していきます。作品形態によってどのように描かれ方が異なるか、印象や意味のちがいがどのようにあらわれているかについても考えていきます。</p> <p>(2) 映像作品の制作活動</p> <p>すでに存在する作品を対象とするだけでなく、このゼミでは主体的に創作活動についても行っていきます。社会や日常世界をどのように写し取り、構成していくかについて考え、実際に映像作品を制作していきます（ショート・ムービー等）。こうした営みによって「現実」認識の相対化と新たな構築という主体的参加を伴った、社会構想の社会的「実践」を進めます。</p> <p>(3) 社会学の研究方法を身につけよう</p> <p>そして社会学の研究方法についても、改めて学んでいきます（主に4年生時）。研究をしたり論文を書いたりするためには、問題関心、研究テーマのブラッシュ・アップのしかたや、それをどのように具体的に分析、考察したらよいかについて分かっている必要があります。そうしたことについても、きちんとおさえていきましょう。なるべく早めに自分が追求したいテーマを見つけて、卒業研究に着手していきましょう。</p> <p>※なお、社会の理解は一領域では完結せず、総合的な学習と理解が必要となります。このため、他の社会系の先生およびゼミとの相互交流・指導を行います。</p> <p>《ゼミの進め方など》</p> <p>最初は共通の文献や論文を取り上げて、まずは分析・考察に必要な知識や方法について目くばせしていきましょう。ゼミではまずは報告と話し合いをしていくことがメインになります。また、3年生（予定）の夏休み期間に、ゼミ合宿を行う予定です。また、映画祭（11月頃）や美術館の特別展等へのゼミでの参加も予定しています。これらへの参加を前提に、エントリーをしてください。</p>			
担当教員からのメッセージ			
<p>ゼミでは使わないでほしい言葉があります。それは、「わかりません」「同じです」です（これらのバリエーションも）。わからないことがあれば、きちんと提起をして、みんなで話し合っって考えていけばよいですし、また、意見が他の人と同じでも、きちんと自分の言葉で述べるのが大事です。また、意見を単純化させすぎることにも気をつけてください（たとえば、「(どうせ)～にすぎない」といった言いまわし）。社会で起こるさまざまな現象は、「～にすぎない」など、一言で答えられるほど単純なくみで現れてくるわけではありません。またこの意味での単純化は、よくない意味での「シニカルさ」につながり、結局何も考えていないことになってしまう恐れもあります。わからないことや知らないことがあるのは恥ずかしいことではありません。集中しつつもリラックスして、ゼミに臨んでください。そのための環境づくりには配慮していくつもりです。</p>			